

# カナリアアイロニカル

えのもとぐりむ

## 【登場人物】

黒須ミサ——鬱病を含む精神障害、アルツハイマー等の脳障害。

上野なつひ

黒須ジョウジ——ミサの夫

SHOGO

都居——記者

安達健太郎

黒須ナオミ——ミサの娘

A 柴小聖

B 水原ゆき

江間——刑務官。主任看守

守谷——刑務官。看守

清水一希

嘉門——刑務官。新人看守

A 塚本英亜

B 山本涼平

○森の奥にあるロτζジ（夜）十五年前

窓から月灯り。

中央には黄色いピアノが一台。

ミサが弾くピアノの音と、鼻歌が聞こえてくる。

穏やかに微笑んでいるミサ。

黒須が背後から女を抱きしめる。

ピアノを弾くミサの手が止まり――。

ミサ あなた、お願い

ミサが演奏を再び始めようとした時――。

黒須がミサの首を絞める。

苦しむミサの指が鍵盤を不規則に鳴らす。

○牢の中（夜）十五年前

「あー」と声を漏らしている黒須。

看守の江間が懐中電灯を片手に近づいて来る。

江間 どうした

黒須 あー

江間 静かにしろ

黒須 あー

江間 おい、静かにしろ！ どうしたんだ？

黒須が檻の鉄棒に腕を絡める。

黒須 僕はこうやって妻の首を絞めたんです。こうやって妻の首を、思いつ切り

江間 ああ、分かった、そうやって自分の妻を殺めたんだな、分かったから、落ち着け

黒須 妻は僕の腕の中で、さして抵抗もせずに、眠るように死にました

江間 その時のことを思い出して、眠れないか？

黒須 はい……生きるのは、かなしいなあ

江間 死ぬなよ

黒須 死ぬのは怖いです

江間 だったら生きろ

黒須 だから妻は殺してくれと願ったのですね

江間 いいから寝ろ、就寝時間はとくに過ぎてるぞ

黒須 自分が死にたいと思って初めて妻を理解できたかもしれません

江間 囚人番号、703番、それ以上の私語は許すことができない

黒須 死にたい。殺してもらえませんか？

江間 私語を慎みなさい

黒須 (笑む)……僕もそうでした。理解に及ばない話は否定することしかできない。僕の願いが理解できないですよね？

江間が周りを見渡し、鉄の檻に近寄る。

江間 分かるよ、私がお前の立場だったら同じことをするかもしれない。だけど……

黒須 だけど？

江間 お前の妻はまだ若かったんだよな？

黒須 はい

江間 病気が治る可能性は十分にあったんじゃないのか？

黒須 そうかもしれません

江間 看病が辛かったのも分かる。だけど、もう少し時間を掛けて――

黒須 時間を掛けるんじゃないかって、妻が望んだことは時間を狩ることです

江間 ん、狩るとは？

黒須 獲物を狩るように、時間を狩るんですよ

江間 何だそれは(笑む)ちょっと私には理解ができない話だ

黒須 分かりますよ。誰もが妻と同じことを考えたことがあるでしょうから

江間 何だ？ お前の妻が望んだこととは？

黒須 誰もが思うことです

江間 お前が自殺なんてしない為にも、その話を聞いてやる、教えてくれ

黒須 それは……

○タイトル

カナリアアイロニカル

○森の奥にあるロッジ（昼）現在

●SEヤカンが沸騰する音

ナオミがカウンタートキッチンでコーヒーを出す準備をしている。

都居がカメラで山小屋内を撮っている。

都居 ここで十五年前に君のお父さんがお母さんを殺害した

ナオミ そうです

都居 こんな森の奥にある小さなロッジで

ナオミ うるさい

ナオミがコンロの火を止める。

都居 何故、殺すことを選んだのか

ナオミ ブラックですか？

都居 うん。君は今もここに住んでるの？

ナオミ いいえ、私もここに来るのは十五年ぶりです

都居 え……じゃあここには今、誰が住んでるの？

ナオミ 私は知りません

都居 知らないって、じゃあ我々は不法侵入だね、これ

ナオミ 誰も住んでないんじゃないですかね

都居 ははっ、何を根拠に。誰も住んでないにしては綺麗だよ、ここ

ナオミ びっくりしました。あの時のまんまで

都居 あの時のままって、十五年前と？

ナオミ その黄色いピアノ、お母さんがよく弾いてました

都居 それなら尚更ここには誰か住んでいるか、管理しているはずだ。その誰かはどうしてだか昔のままを保ってくれている……

ナオミがコーヒーを机に置く。

ナオミ 人が殺されたロジに好き好んで住む人間はいないと思いますけどね。どうぞ

都居 君は人んちで勝手にお湯を沸かしたの？

ナオミ 具合の良さそうなヤカンがそこにあっただから

都居 で、勝手にコーヒーまで淹れたのか？

ナオミ コーヒー、いつも持ち歩いてるから

都居 へー

都居がコーヒーを一口啜る。

都居 なんで？

ナオミ こうやって匂いを嗅いで落ち着く用

都居 俺にとつてのタバコみたいなもんだ

煙草を啜えた都居がジッポライターの着火に手古摺っている。

都居 おれにとつての、ん、タバコ、あれ

ナオミ ん、待って！ 火を着けないで！

都居 わ

ナオミが都居からライターを奪う。

都居 なになににどうした？

ナオミ ガス

都居 ガス？

ナオミがガスの元栓を閉めにいく。

ナオミ ガス漏れしてる

都居 (嗅ぐ) よく気付いたね。全然、気付かなかったよ

ナオミ ガスの臭いに敏感なんです、私。ガス漏れ発見器なんです、私の鼻

都居 ……カナリア

ナオミ カナリア？

都居が手帳をペラペラと捲っていく。

都居 炭鉱のカナリアって聞いたことあるでしょ、炭鉱で有毒ガスが発生したらカナリアが鳴くのを止める。もしかして君はカナリアなのかい？

ナオミ 私、人間

別空間の面会室に黒須が現れる。

都居 君の父親がカナリアのことを話していた。あつた、これだ（手帳を読む）

黒須 カナリアを飼ったことがありますか？

都居 美しい声で鳴く、黄色くて小さな鳥です

黒須 カナリアは次から次へと新しい歌を覚えます。いつもカナリアは鳥籠から私の為に歌ってくれました

都居 多くの時間を愛おしく眺めることに費やしました。だけど、いつの日からかその鮮やかな色が殺意を覚えるほど目障りで、鳴き止む事のない声が動悸を覚えるほど耳障りに感じるようになりました

黒須 そういう気持ち伝わったのか、カナリアが時々、金切り音を響かせて鋭く尖がった視線で私を刺すように睨むのです

都居 見ないようにすればいいのではないかと言われてしまえばそれまでですが、そうはいかなかったのです

黒須 私がいないと死んでしまいますから、そのカナリアはそれに空を奪って鳥籠に閉じ込めたのは私です。可哀想なことをしているという

罪悪感もありましたので目を逸らしてはいけません

別空間の黒須が消える。

ナオミ お父さんがそんなことを？

都居 逮捕された後、弁護士にこの話をしたらしい。カナリアを飼っていた記憶はある？

ナオミ カナリアなんて飼った記憶ないです

都居 君が生まれる前の話なのかな

ナオミ さあ。そもそも、お父さんは家に入ってきたカマキリも殺さずに外に返してあげる

ような人でした

都居 カマキリは殺す人の方が少ないだろ

ナオミ カマキリ殺したら気持ちわりい黒くて細長い奴がお尻から出てきますよね

都居 寄生虫ね、それ見たくないしカマキリ家に入ってくるなんて滅多にないだろ

ナオミ カマキリにそんなに引つ掛かるとか、都居さん変わった人ですね

都居 君だよ変わってるのは。カマキリじゃなくてもっと他にいますでしょ、蚊とか蠅とか蛾とか家に迷い込む虫

ナオミ いましたよ、そういう虫も。お父さんはそういう小さい虫も殺せない人でした

都居 やっとしっくりきたよ

ナオミ 飼っていたカナリアに殺意を覚えただなんて作り話だと思います。死刑にでもなりましたか

都居 死刑になりましたか？

ナオミ お母さんを殺してしまった罪悪感というか、自分もお母さんの後を追って死にたいというか

都居 まあでも残念ながら、一人殺したくらいじゃ死刑にはならない

ナオミ 自分を危険人物に仕立て上げて少しでも罪を重くしたかったのかも

都居 だとしたらお父さんの作戦は失敗だね、情状酌量の余地があるとして減刑され僅か十年で牢屋から出た

ナオミ そもそも私はお父さんがお母さんを殺したことも未だに腑に落ちていません

都居 お父さんに会いたい？

ナオミ 会いたいけど、もう会えない気がします

都居 釈放されてから一度も会ってないの？

ナオミ はい。釈放されて以降、ずっと行方不明のままです

都居 捜索願いは出してるんだよね？

ナオミ はい。どこかの樹海で自殺したのかなって、今はそう思ってます  
娘の君を残して？

ナオミ はい……お父さんはお母さんが全てだったし、もしかしたら、お父さんは私を憎んでいたかもしれないし

都居 憎んでいた？

ナオミ 私のせいでお母さんは壊れてしまったんです

都居 お母さんは精神障害を患ってたんだよね？

ナオミ 育児ノイローゼが切っ掛けだと思います。私、よく泣く子供だったんです。泣くと

母はヒステリックに私を叱りました。お父さんは長距離のトラック運転手だったので、ほとんど毎日がお母さんと二人きりの時間でした。お母さんが私のことで溜息をつく度に、今すぐ消えて無くなりたかった

都居 楽しい思い出もないの？

ナオミ ありますよ。昔住んでいた家のベランダで黄色いトマトを育てていて、それをお母さんと眺めるのが幸せな時間でした。スーパーでレモンやバナナやパプリカをカゴに入れる時にお母さんが私の顔を見て微笑んで、そしたら私が「お母さんって本当に黄色いものが好きだよね」って言うのがお決まりで楽しかった

都居 そこにあるピアノも黄色だね

ナオミ 確か、お父さんがペンキで塗ったんです、カナリアイエローのペンキで

都居 カナリアイエロー？

ナオミ お母さんが好きだった色の種類。カナリアイエロー

都居 やっぱりカナリアを飼ってたんじゃないかな、そこに鳥籠もあるし

ナオミ うん、でも私は覚えてません

都居 そっか

ナオミがピアノの鍵盤を叩きながら――

ナオミ 私が小学生になった頃、子育て疲れと仕事のストレスで母は完全に壊れてしまいました

都居 ここで暮らし始めたのは、その頃？

ナオミ そうです。お父さんはトラック運転手を辞めて、ここで母の療養も兼ねてロッジ経営を始めました。私は親戚に預けられて、春休み、夏休み、冬休みって学校が長く休みになる時だけ、ここに來ることができました

都居 離れて暮らすのは寂しくなかった？

ナオミ いえ、逆に楽になりました。優しく綺麗なお母さんが壊れていくのを見るのが辛かったんです。私が生まれてきたせいで、って思うのが私も苦しかった

都居が手帳にペンを走らせている。

ナオミが覚束無い指で曲を弾くと、部屋の照明が点滅する。

ナオミ なに？



都居 森の奥だし、電気の供給が不安定なんじゃないかな

壁掛け時計が落ちて、時報鳥がホロツホウと鳴く。

都居 あーあ、壊れちゃった

ナオミ うるさい

ナオミが時報鳥を乱暴に黙らせる。

ナオミ 都居さんはどうしてこの事件に興味を持ったんですか？

都居 え、んー

ナオミ もう何年も前なのに。調べ甲斐のある派手な事件でもないのに

黒須とミサが「ただいま」と現れる。

黒須は様々な野菜が入られたダンボールを持っている。

黒須 あ、すみません、買い出しに出かけてました、ご宿泊ですか？

都居 え、あれ（ナオミを見る）

ナオミ ……いた

都居 黒須さん、ですよね？

黒須 はい、ロτζジ黒須にようこそ。飛び込みのお客さんなんて珍しいので嬉しいっす。

お部屋空いているので大丈夫すよ、何泊します？

ミサ いらっしやいませ

黒須 ミサ、これ（ダンボール）、食料庫に

ミサ うん

ミサは無表情で誰とも目を合わさず食料庫に向かう。

黒須 無愛想ですみません、私の妻、ちよつと心の病気であんな感じなんですけど気にしないでください、お部屋はおひとつでいいっすよね？

ナオミ お父さん

黒須 ……お二人でご宿泊でいいですよね？